

令和8年3月11日

IR推進室

IR情報による八戸学院大学短期大学部の教育課程の検証について

短期大学部の教育課程についてIR情報を用いて、短期大学部の3つの方針を意識した3つの領域「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」「B 教育の質」「C 学修成果」から分析し検証を試みる。3つの領域で、根本的な問題がないと判断できた場合、教育課程の適切性が、担保されていると結論づけることとします。

1. 各領域の検証におけるIR情報について

各領域の分析・検証に用いたIR情報は以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」の分析・検証に用いたIR情報

- ①2024年度生の卒業時の単位取得状況【資料A-①】(p3)
- ②学習時間・学修行動に関する調査結果(2024年度後期/2025年度前期実施)
 - Q『授業期間の学生の1日あたりの学習時間』【資料A-②】(p3)

「B 教育の質」の分析・検証に用いたIR情報

- ①卒業時アンケート(2023年度生)【資料B-①-1から3】(p4)(令和7年3月実施)
 - Q5「知識や能力を身に付けるために、大学教育は役に立ったと思いますか」
 - Q6「学生生活に関した支援についてどう思いますか」
 - Q1から4「短期大学部の評価」

「C 学修成果」の分析・検証に用いたIR情報

- ①資料C-①卒業要件を満たした学生のGPAの結果【資料C-①】(p5)
- ②卒業生に関する就職アンケート短期大学部2022年度生(令和7年7月実施)【資料C-②-1から3】
 - Q2-1『卒業生の能力評価』(p5)
 - Q2-2『施設への貢献度』(p6)
 - Q3『本学の学生に望むこと』(p6)
- ③2025年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握調査(春学期)」報告書(2024年度生)【資料C-③】(別資料)

2. 各領域の検証の結果について

IR 情報を用いた教育課程の分析・検証の結果については以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」について（p3）

幼児保育学科の教育課程においては、卒業、保育士資格及び幼稚園教諭二種免許状の取得の必要単位数、介護福祉学科の卒業必要単位数は 90 数単位であるが、両学科とも総平均取得単位数であっても、一定の割合を上回っています（幼児保育学科 107 単位、介護福祉学科 106 単位）【資料 A-①】。

このことから、修学期間内、学生はアドミッション・ポリシーに示す人物像に見合う意欲と姿勢を堅持していることが読み取れます。また、授業期間中の 1 日あたりの学習時間については、2024 年度後期と 2025 年・前期分を再集計すると短期大学部全体（269 名）で「1 時間から 2 時間」に占める割合が例年同様に最も高く（28%：74 名）、それより多い「3 時間以上」も高い割合（25%：67 名）になっています【資料 A-②】。

卒業時の総単位取得数から勘案される過密な 1 日の中、これだけの学習時間を学生自ら創出し学びに向き合う意欲と姿勢を確認できることから、この領域の根本的な問題はないと考えます。

「B 教育の質」について（p4）

2023 年度生の卒業時アンケートの教育の有用性の 6 項目において肯定的な評価「とても役立った/役立った」が、93%以上、占有しています。専門的な知識・技術、社会人基礎力にかかわるものの見方・考え方、問題解決力など、ディプロマポリシーにある力の育成に対する教育効果の認識が読み取れます【資料 B-①-1】。

学びを支える生活の支援でもすべての項目も肯定的な傾向があり（88%以上）（【資料 B-①-2】、短期大学部の全体的な評価の 4 項目においても肯定的な評価「強く思う（非常に満足）/思う（満足）」は、高い割合（88%以上）となっています【資料 B-①-3】。これらのことから、この領域の根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、アセスメントポリシーに即した多様な情報を統合した検証を行うことが欠かせないと思われます。

「C 学修成果」について（p5 からそれ以降）

2024 年度生の卒業時の GPA 平均（幼児保育学科（前年度 3.06）、介護福祉学科（前年度 2.65））から、学生は科目の学修の成果を獲得していることが読み取れます【資料 C-①-1】。令和 7 年 7 月に実施した短期大学部の 2022 年度生（令和 6 年 4 月採用）の就職先での能力評価においても、2 項目「保育（介護）に関する知識・技術をもって適切な判断ができる」（63%）「問題解決能力がある」（58%）を除く、8 項目で肯定的な評価「とてもある/ややある」の割合が非常に高く（75%以上）、高水準となっています【資料 C-②-1】。

施設への貢献度は、肯定的な評価「大いに貢献している/貢献している」の割合（84%）が大部分を占めています【資料 C-②-2】。今後の本学学生に望むことにおいて、「社会人としての礼儀作法・言動等」（18%）「仕事に対する積極性」（15%）「仕事を完遂させる責任感」（15%）「職場での協調性」（15%）「保護者や利用者から信頼される人柄」（15%）の順となっており【資料 C-②-3】、引き続き、教育課程（科目内容）の内容等において意識する必要があるかもしれない。このことから、本学の学修成果は、就職後にも通用する水準であると言えます。また、学生自身の学修成果の主観的な評価の結果である【資料 C-③】においても、学生自身が学びの積み上げ、成長を実感できていることが多くの項目で読み取れることから、この領域において根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、カリキュラムの領域ごと「教養/専門」の成績評価の割合や GPA などの情報等を加えることが欠かせないと思われます。

資料A-① 卒業要件を満たした学生の単位取得

	幼児保育学科		介護福祉学科	
	2024年度生（52名）	2023年度生（45名）	2024年度生（11名）	2023年度生（35名）
総取得単位数平均	107	106	106	104
最大	115	110	108	106
最小	99	87	100	102
中央値	107	107	108	106
標準偏差	2.99	4.14	2.65	1.54

保育士資格＋幼稚園教諭２種免許（48名）保育士資格のみ（３名）幼稚園教諭２種免許のみ（0名）卒業のみ（0名）

資料A-② 短期大学部における学修時間・学修行動に関する調査「Q授業期間中の学生の１日あたりの学習時間」

幼児保育学科	学年	回答者数	1：0から30分	割合	2：30分から1時間	割合	3：1から2時間	割合	4：2から3時間	割合	5：3時間以上	割合
2024年度後期	1年生	53	11	21%	16	30%	9	17%	6	11%	11	21%
	2年生	41	8	20%	12	29%	10	24%	8	20%	3	7%
2025年度前期	1年生	54	3	6%	15	28%	15	28%	6	11%	15	28%
	2年生	49	11	22%	6	12%	9	18%	6	12%	12	24%
幼児保育学科全体		197	33	17%	49	25%	43	22%	26	13%	41	21%
介護福祉学科	学年	回答者数	1：0から30分	割合	2：30分から1時間	割合	3：1から2時間	割合	4：2から3時間	割合	5：3時間以上	割合
2024年度後期	1年生	11	0	0%	2	18%	4	36%	3	27%	2	18%
	2年生	35	1	3%	8	23%	10	29%	10	29%	6	17%
2025年度前期	1年生	15	0	0%	1	7%	6	40%	5	33%	3	20%
	2年生	11	0	0%	0	0%	4	36%	2	18%	5	45%
介護福祉学科全体		72	0	0%	1	1%	10	14%	7	10%	8	11%
1年次全体		133	14	11%	34	26%	34	26%	20	15%	31	23%
2年次全体		136	20	15%	26	19%	33	24%	26	19%	26	19%
短期大学部全体		269	34	13%	66	25%	74	28%	44	16%	67	25%

資料B-①-1 卒業時アンケート「Q5知識や能力を身につけるために、大学教育は役にたったと思いますか」

【4:とても役に立った 3:役に立った 2:あまり役に立たなかった 1:役に立たなかった】

項目	評価	4	比率	(前年度)	3	比率	(前年度)	2	比率	(前年度)	1	比率	(前年度)	合計
1) 専門分野に関する知識・理解	2023年度生	43	54%	(66%)	36	46%	(32%)	0	0%	(1%)	0	0%	(1%)	79
2) 将来の仕事に関連する知識・技能	2023年度生	43	54%	(66%)	36	46%	(30%)	0	0%	(3%)	0	0%	(1%)	79
3) 幅広い知識・ものの見方・考え方	2023年度生	40	51%	(62%)	37	47%	(37%)	2	3%	(1%)	0	0%	(0%)	79
4) 問題を見つけ、解決方法を考える力	2023年度生	39	49%	(52%)	36	46%	(46%)	4	5%	(1%)	0	0%	(1%)	79
5) 地域社会の発展に貢献する力	2023年度生	35	44%	(46%)	43	54%	(47%)	1	1%	(4%)	0	0%	(2%)	79
6) コミュニケーション能力	2023年度生	40	51%	(62%)	35	44%	(37%)	4	5%	(1%)	0	0%	(0%)	79
7) 社会人としての礼儀作法	2023年度生	40	51%		35	44%		4	5%		0	0%		79

資料B-①-2 卒業時アンケート「Q6学生生活に關した支援についてどう思いますか」

【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】

項目	評価	4	比率 (%)	(前年度)	3	比率 (%)	(前年度)	2	比率 (%)	(前年度)	1	比率 (%)	(前年度)	合計
1) 学生指導に熱心な教員・職員が多い	2023年度生	31	39%	(42%)	41	52%	(52%)	6	8%	(5%)	1	1%	(1%)	79
2) 学修を支援する体制（奨学金など経済的支援）が充実している	2023年度生	31	39%	(39%)	41	52%	(55%)	6	8%	(6%)	1	1%	(0%)	79
3) 学生生活を支える体制（学生相談室・ハラスメント相談）が整っている	2023年度生	29	37%	(44%)	43	54%	(48%)	4	5%	(4%)	3	4%	(3%)	79
4) 学修関連の施設（図書館、実習室・教室等）や設備が充実している	2023年度生	31	39%	(40%)	45	57%	(54%)	3	4%	(6%)	0	0%	(0%)	79
5) スポーツ関連の施設や設備が充実している	2023年度生	28	35%	(34%)	42	53%	(61%)	8	10%	(5%)	1	1%	(0%)	79

資料B-①-3 卒業時アンケート 短大評価

項目1) 3) 4) 【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】

項目2) 【4:非常に満足 3:満足 2:やや満足 1:非常に不満足】

項目	評価	4	比率 (%)	(前年度)	3	比率 (%)	(前年度)	2	比率 (%)	(前年度)	1	比率 (%)	(前年度)	合計
1) あなたは、本学に入学してよかったと思いますか。	2023年度生	27	34%	(52%)	50	63%	(55%)	2	3%	(2%)	0	0%	(1%)	79
2) あなたは卒業後の進路に満足していますか。	2023年度生	25	32%	(38%)	51	65%	(55%)	3	4%	(7%)	0	0%	(0%)	79
3) 入学から卒業までの学生生活は充実していたと思いますか。	2023年度生	30	38%	(49%)	44	56%	(47%)	5	6%	(3%)	0	0%	(0%)	79
4) あなたは本学への進学を誰かに勧めたいと思いますか。	2023年度生	17	22%	(32%)	50	64%	(65%)	7	9%	(1%)	4	5%	(2%)	78

資料C－① 卒業要件を満たした学生のGPA

	幼児保育学科		介護福祉学科	
	2024年度生 (52名)	2023年度生 (45名)	2024年度生 (11名)	2023年度生 (35名)
GPA平均	3.06	2.8	2.65	2.49
最大	3.85	3.87	3.32	3.5
最小	1.96	1.37	1.91	1.32
中央値	3.21	2.81	2.81	2.45
標準偏差	0.5	0.61	0.52	0.42

資料C－②-1 短期大学部 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の能力評価」

【5・とてもある 4・ややある 3・どちらともいえない 2・あまり思わない 1・まったく思わない】

項目	評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
1) コミュニケーション能力がある	令和6年4月採用 (2022年度生)	8	20%	23	56%	5	12%	5	12%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	18	34%	20	38%	9	17%	5	9%	1	2%	0	11.3%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	19	29%	25	38%	10	15%	4	6%	2	3%	6	9.1%	66
2) 理解力がある	令和6年4月採用 (2022年度生)	5	12%	26	63%	7	17%	3	7%	0	0%	0		41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	16	30%	25	47%	8	15%	3	6%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	15	23%	28	42%	12	18%	3	5%	2	3%	6	9.1%	66
3) 保育（介護）に関する知識・技術をもって適切な判断ができる	令和6年4月採用 (2022年度生)	1	2%	25	61%	10	24%	5	12%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	11	21%	28	53%	9	17%	4	8%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	5	8%	28	42%	21	32%	3	5%	2	3%	7	10.6%	66
4) 責任感を持って職務を遂行できる	令和6年4月採用 (2022年度生)	11	27%	22	54%	6	15%	2	5%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	21	40%	19	36%	10	19%	2	4%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	26	39%	18	27%	12	18%	2	3%	2	3%	6	9.1%	66
5) 問題解決能力がある	令和6年4月採用 (2022年度生)	1	2%	23	56%	14	34%	3	7%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	12	23%	15	28%	23	43%	2	4%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	4	6%	21	32%	27	41%	5	8%	3	5%	6	9%	66
6) 自己管理能力がある	令和6年4月採用 (2022年度生)	7	17%	25	61%	6	15%	2	5%	1	2%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	16	30%	19	36%	13	25%	3	6%	2	4%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	15	23%	20	30%	15	23%	6	9%	4	6%	6	9.1%	66
7) 協調して仕事ができる	令和6年4月採用 (2022年度生)	10	24%	21	51%	7	17%	3	7%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	21	40%	21	40%	7	13%	4	8%	0	0%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	26	39%	20	30%	7	11%	4	6%	1	2%	8	12.1%	66
8) ルールに従って行動できる	令和6年4月採用 (2022年度生)	11	27%	25	61%	4	10%	1	2%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	22	42%	23	43%	5	9%	3	6%	0	0%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	32	48%	16	24%	8	12%	3	5%	0	0%	6	9.1%	66
9) 行事等に積極的に参加する	令和6年4月採用 (2022年度生)	12	29%	19	46%	9	22%	1	2%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	23	43%	20	38%	9	17%	0	0%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	34	52%	13	20%	9	14%	3	5%	1	2%	6	9.1%	66
10) 向上心がある	令和6年4月採用 (2022年度生)	10	24%	22	54%	7	17%	2	5%	0	0%	0	0%	41
	令和5年4月採用 (2021年度生)	20	38%	21	40%	10	19%	1	2%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)	19	29%	24	36%	12	18%	3	5%	2	3%	6	9.1%	66

資料C-②-2 短期大学部 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の貴施設への貢献度について」

【5:大いに貢献している 4:貢献している 3:どちらともいえない 2:あまり貢献していない 1:貢献していない】

	評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	16	33%	25	51%	8	16%	0	0%	0	0%	0	0%	49
令和5年4月採用 (2021年度生)		24	45%	21	40%	6	11%	2	4%	0	0%	0	0%	53
令和4年4月採用 (2020年度生)		24	36%	25	38%	6	9%	2	3%	1	2%	8	12%	66

資料C-②-3 短期大学部「今後、本学学生に望むこと（複数回答可：無回答を除く）」

項目			回答数	比率	項目合計比率
1) 保育（介護）に必要な基礎的な知識・技術	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	24	14%	14%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		17	12%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		28	16%	
2) 仕事に対する積極性	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	26	15%	19%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		22	4%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		42	24%	
3) 仕事を完遂させる責任感	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	25	15%	11%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		16	12%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		11	6%	
4) 職場内での協調性	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	25	15%	16%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		25	18%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		25	14%	
5) 仕事の処理能力	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	14	8%	7%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		9	7%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		10	6%	
6) 社会人としての礼儀作法・言動等	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	30	18%	18%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		26	19%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		31	18%	
7) 保護者や利用者から信頼される人柄	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)	26	15%	15%
	令和5年4月採用 (2021年度生)		19	14%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)		26	15%	
8) 文章力	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)			
	令和5年4月採用 (2021年度生)		2	1%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)				
9) 精神的安定	令和6年4月採用 (2022年度生)	件数(社)			
	令和5年4月採用 (2021年度生)		2	1%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)				

2025 年度 八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握（春学期）」調査報告

2026 年 2 月 19 日

IR 推進室

1. 概要

本学の幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は、定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画し 2020 年度より実施してきている。調査の目的は学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等の教育活動の見直しに繋げることである。本調査報告には、2024 年度生の 2 年間の変遷（第 3 回までの調査）と、2025 年度生の 1 年次（第 1 回までの調査）が示されている。

2. 方法

(1)調査項目の作成

2020 年度に、各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（「入学時を想定した第 1 段階」から、「卒業時に達していることが望まし第 4 段階」まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。その後も両学科ともに、カリキュラムの改編等に合わせて、調査項目の改善に取り組んでいる。評価の観点内容は、各学科のページに記載している。

(2)調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2025 年度中の春学期の試験期間に実施した。

3. 幼児保育学科について

(1)結果の概要

幼児保育学科のディプロマポリシーは表 1 の通りである。

表 1 幼児保育学科のディプロマポリシー

- | |
|--|
| 1. 人を愛し、郷土を愛する心を有し、豊かな教養と人間性を身につけている。
2. それぞれの専門的分野において求められる専門的な知識と技術、そして生涯にわたって学び続けようとする姿勢を身につけている。
3. 他者と協働して社会的役割と責任を果たし、地域社会に貢献することができる。 |
|--|

評価の観点のうち、①～⑤がポリシーの 1、⑥～⑯がポリシーの 2、⑰から⑳がポリシーの 3 に対応している。その結果を 5～12 ページに示している。

回収率は全ての調査において、2 年生 92.4%、1 年生 100%で、有効回答率は 100%であった。

(2) カイ二乗検定の結果 (表 2)

1) 2024 年度生の結果

2024 年度生の 1 年次前期と 2 年次前期の結果において有意差が認められたのは、

- | |
|---|
| ④学びへの態度 ($\chi^2(3)=10.105, p=0.0176$) ⑥保育 ($\chi^2(3)=10.838, p=0.0126$)
⑦福祉・養護 ($\chi^2(3)=9.611, p=0.0221$) ⑧乳児・保健 ($\chi^2(3)=11.641, p=0.0087$)
⑨教職の意義・教育理論 ($\chi^2(3)=15.64, p=0.0013$) ⑩子ども理解 ($\chi^2(3)=11.00, p=0.0116$)
⑪障がい ($\chi^2(3)=14.71, p=0.0021$) ⑫教育実践 ($\chi^2(3)=15.54, p=0.0014$)
⑭ピアノ ($\chi^2(3)=21.17, p=0.0000$) |
|---|

の計 9 つの評価の観点 (11 項目中 81.8%) であった。

2) 2024 年度生のディプロマポリシーの検証

2 年生前期の教育課程を終えた 2024 年度生の結果について、3 つのディプロマポリシーの観点から検証を行う。

ディプロマポリシーの 1 に対応する「①情操」から「⑤判断力・課題解決力」において、1 年次前期から、概ね肯定的な評価段階へ推移しており、2 年次前期の調査では、「④学びの態度」「⑤判断力・課題解決力」の観点項目において、評価段階 3 と 4 (卒業時に達していることが望ましい) の割合が、59%以上となり、次いで「①情操」51.02%となっている。「③地域理解 (文化・自然等)」は、30.61%に留まっている。(最大値は、「⑤判断力・課題解決力」の 61.22%)。いっぽうで、「②対人的情操」は、評価段階 1 の割合が 5 ポイント以上増加し、評価段階 4 も 0%となっている。このことから、

学生は保育の基盤となる人間性や教養、総合的な判断力、そして地域への理解について、学生は自身の一定の肯定的な変化を認識しながら学びを進めていることが読み取れる。

ディプロマポリシー 2 に対応する「⑥保育」から「⑰言葉」においても 1 年次後期と 2 年次前期の調査では、すべての観点項目で評価段階 3 「実習後」への肯定的な推移が確認できる。評価段階 3 および 4 の割合の占有率は、「⑭ピアノ」(24.49%)「⑯健康・体育」(26.51%)を除いたすべての項目で 30%を超えている。「⑨教職の意義・教育理論」「⑬音楽表現」「⑮造形表現」は 45%以上であった。評価段階 4 に限ると、最大値は、「⑩こども理解」「⑭ピアノ」の 14.29%、最小値は、「⑦福祉・養護」「⑧乳児・保健」の 0%となっている。

この点については、各観点項目に対応する科目の開講時期、評価段階の規準の質的な差などの影響もあるとも考えられる。

第 3 回の調査結果から鑑みると、多くの学生が子どもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術の獲得について実感を得ていることが分かる。

ディプロマポリシーの 3 に対応する「⑱保育者の責務」「⑲他者との協働」「⑳子どもの最善の利益」において、2 年次前期の調査では、すべて観点項目において、評価段階 3 と 4 の割合が、42%以上に到達している。保育者としての職務内容・責任を理解し、他者との協働する力について、学生の成長実感を得ていることが読み取れる。

(3) 教育活動の見直し

学修成果の獲得について、第 1 回調査（1 年次前期）と第 3 回調査（2 年次前期）では、おおむね、全ての評価の観点項目が高い評価段階へ向かう推移がみられる。

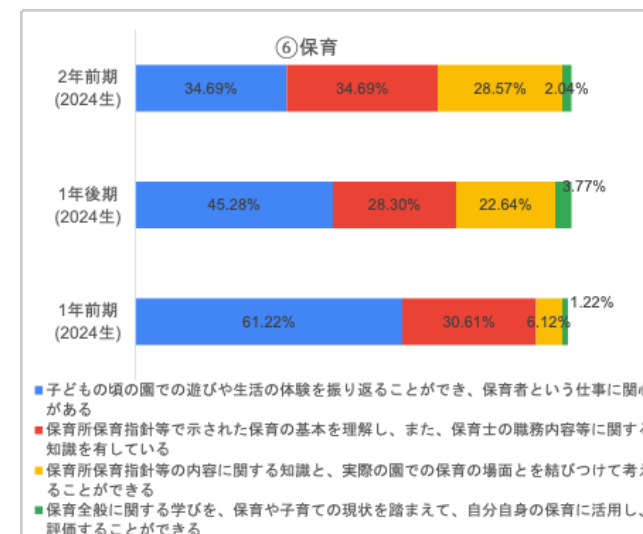
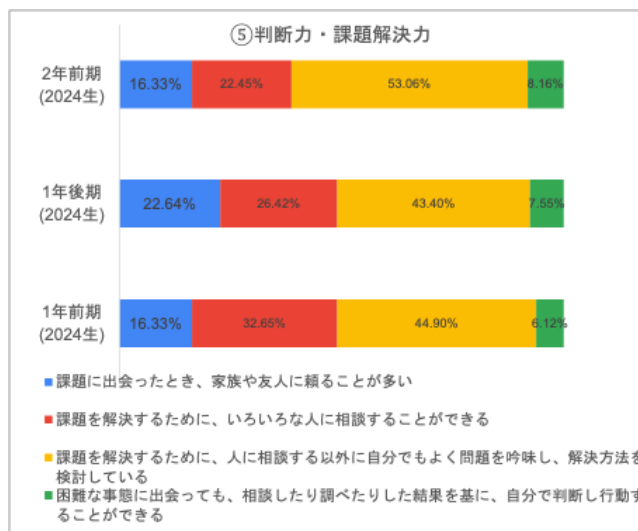
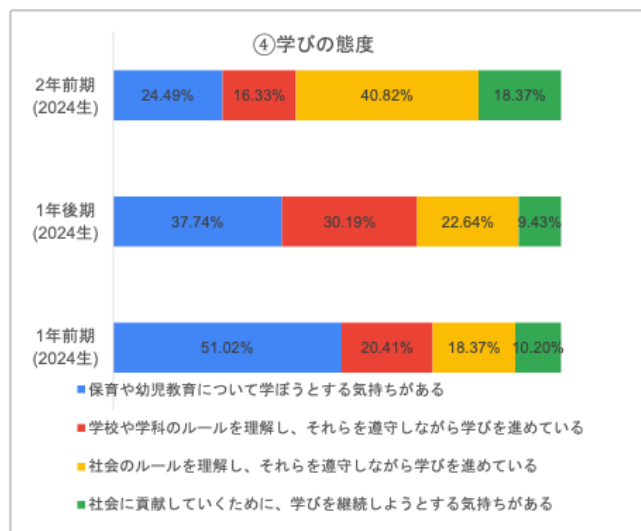
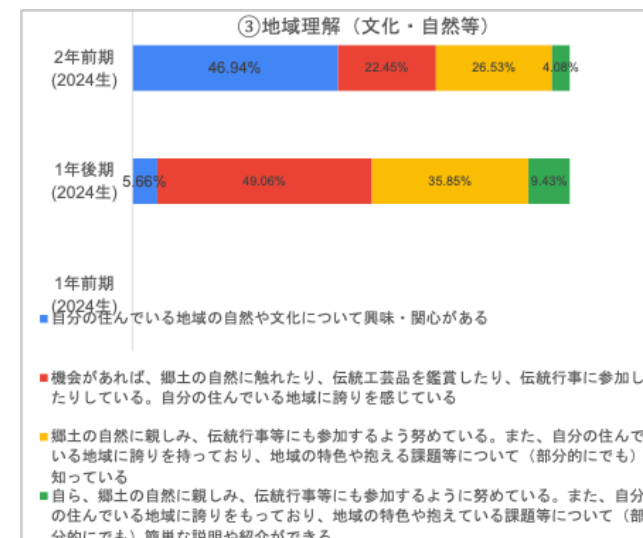
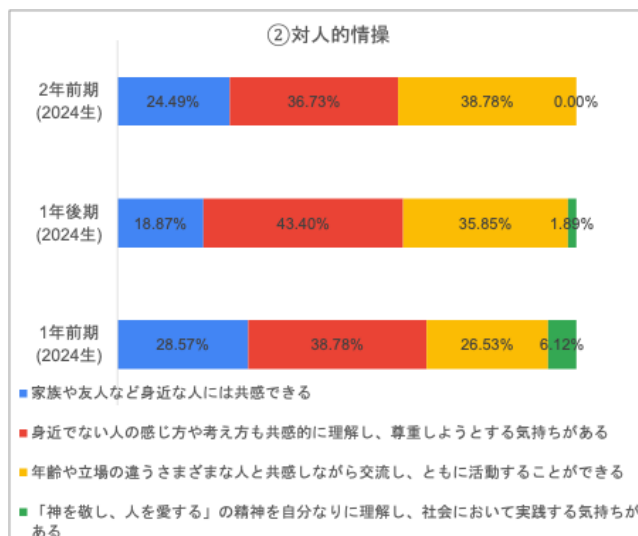
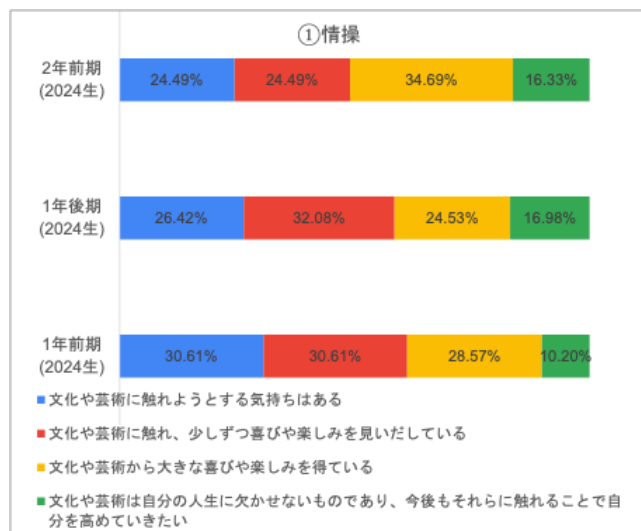
このことから目前に実習を控えている学生が、人としての育ち、保育の専門的な知識・技術の学びを深め、自らの目標に向かう歩みを続けていることがうかがえる。

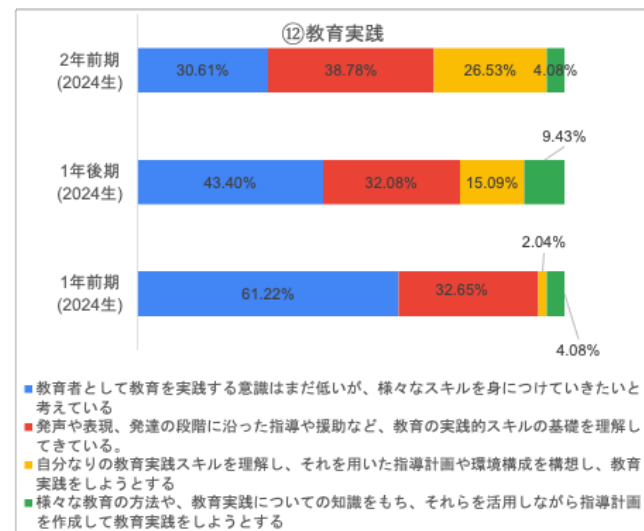
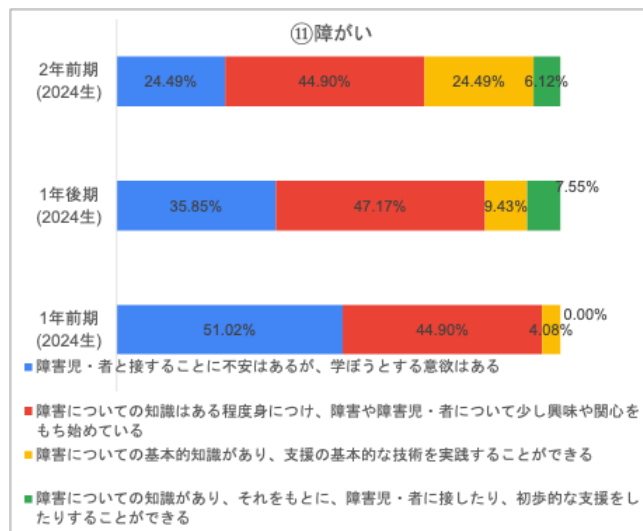
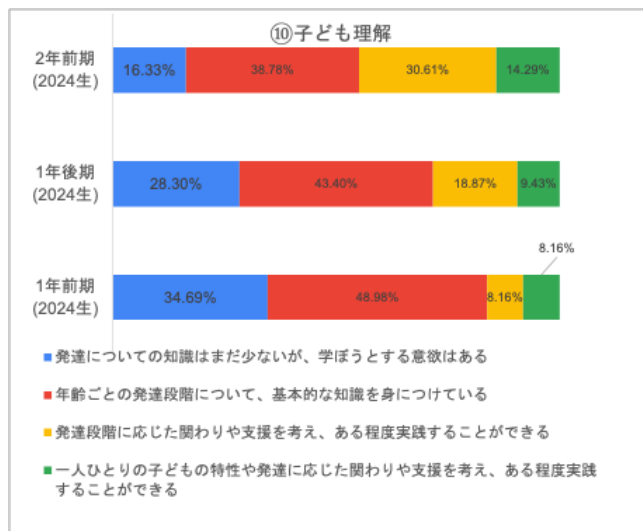
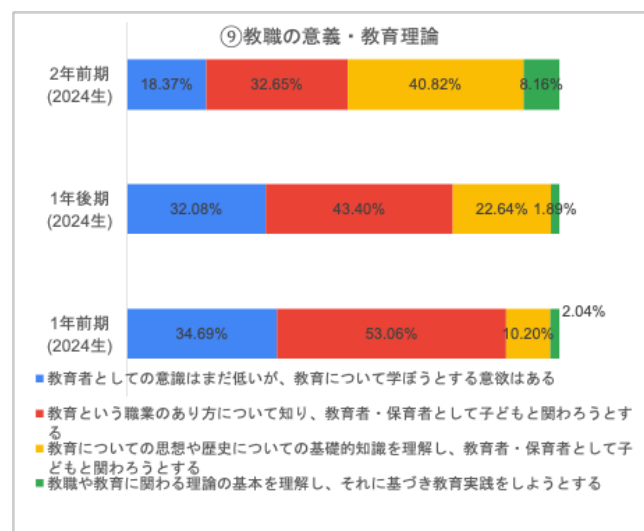
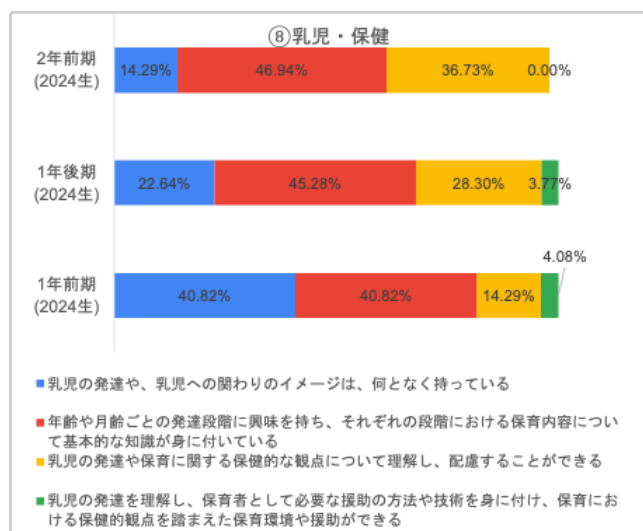
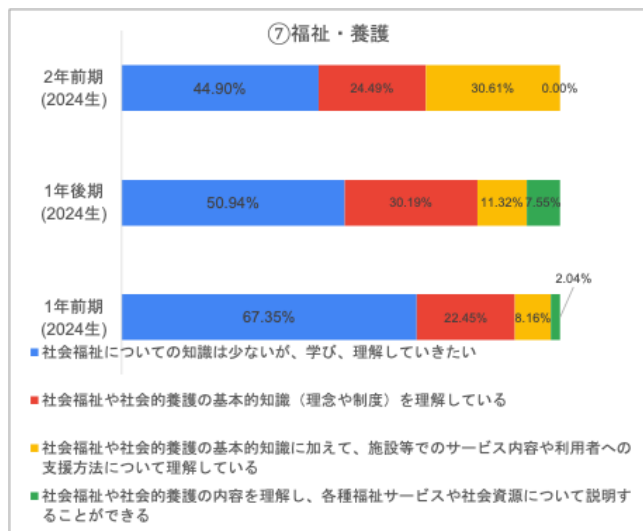
本学の教育課程の課題とも言えるディプロマポリシー 1 「豊かな教養と人間性を身につけている」においても、「地域文化論」「地域文化論実践講座ⅠおよびⅡ」を基軸に、学科として、学生のボランティア活動の機会の提供やサポートを強め、地域の方々の協力や資源を活かして、今後も科目内容の充実に力を注ぎ続けていくことが望まれる。

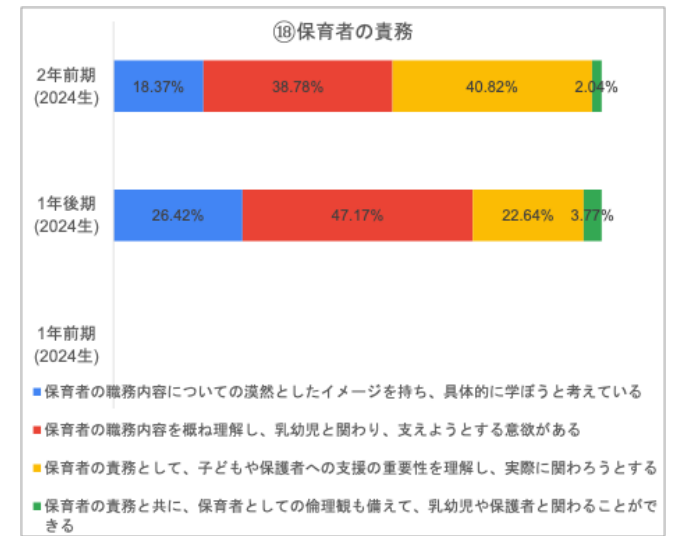
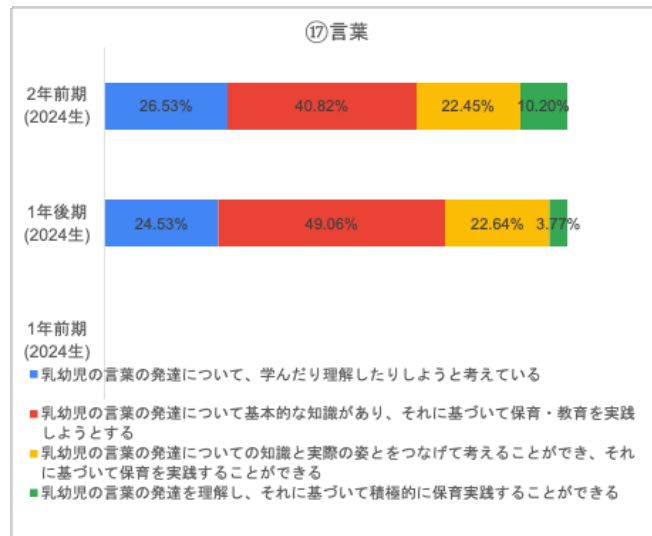
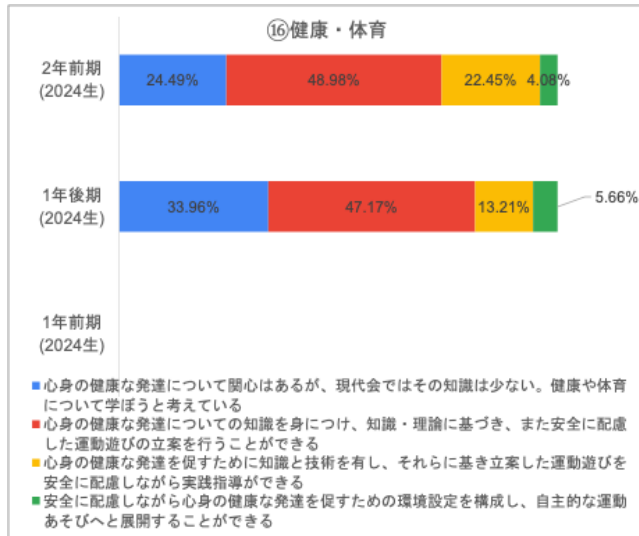
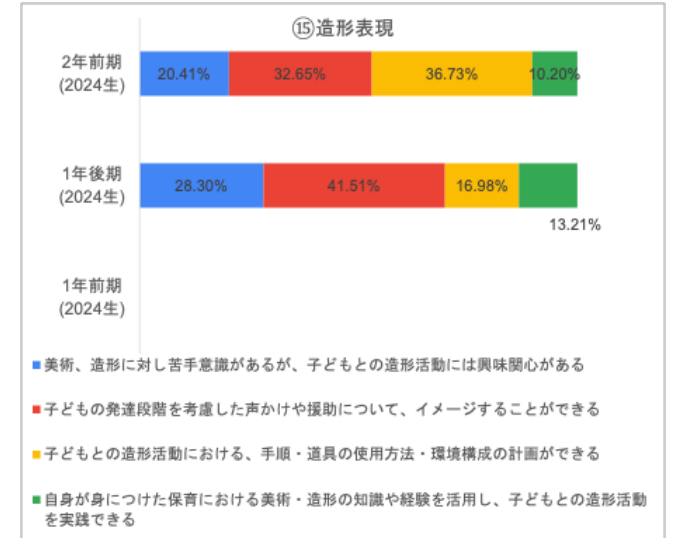
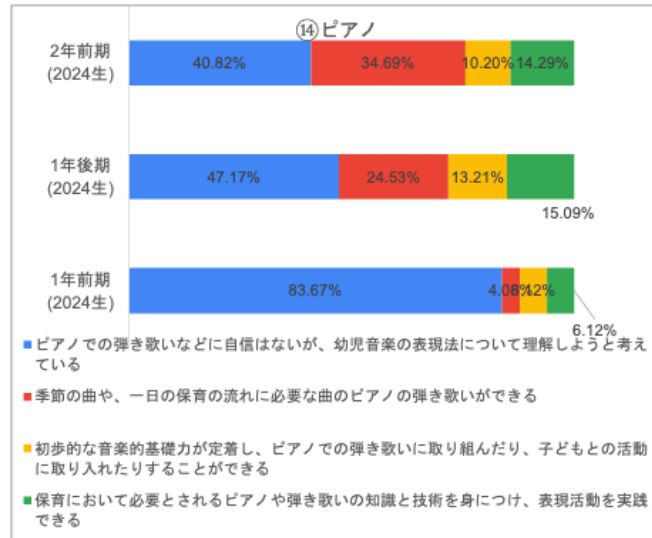
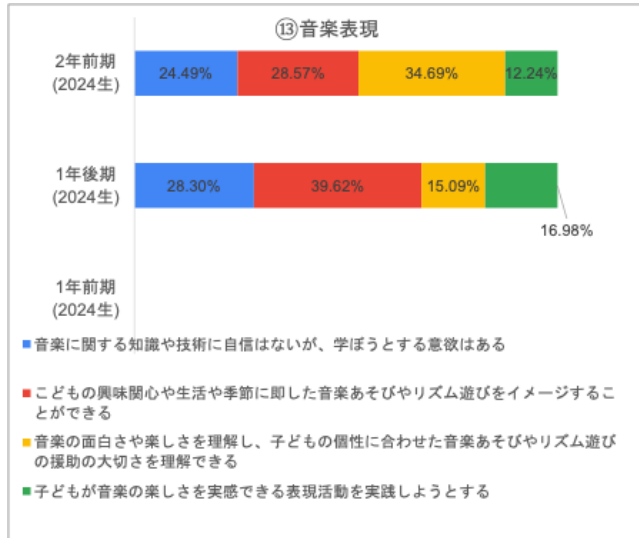
保育の専門的知識・技術にかかわるディプロマポリシー 2 及び 3 に関わる評価の観

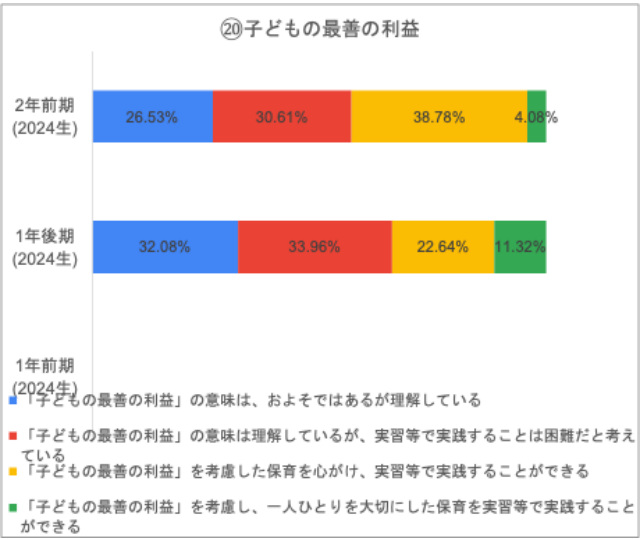
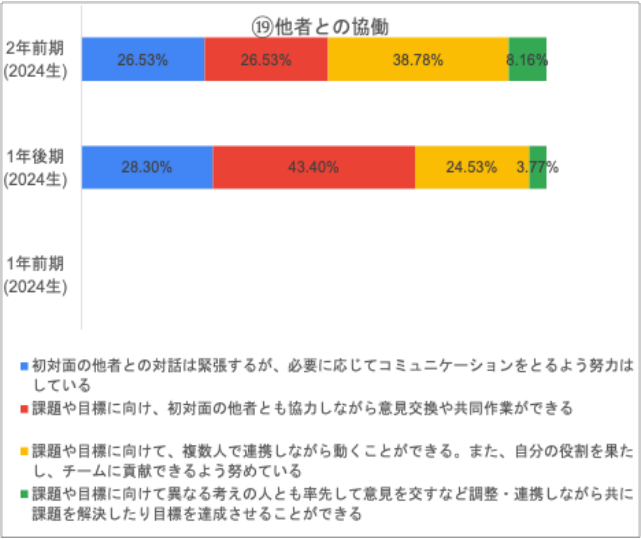
点においても肯定的な評価段階への推移が確認できる。これらの学修成果は、教員の日々の教育活動に向き合う意識・姿勢の高さ、そして授業運営・内容の構成等に対する創意工夫が影響するものであろう。今後も教育課程の一つを担う科目担当者が、担当科目と学修成果の明瞭な対応関係について強い自覚を持ち、深い学びに結びつくよう教育方法の探求、そして省察を常に行うことが重要であろう。また、2025 年度生から 3 年コースが加わり、科目担当者間での強固な連携・協力、相互理解が必要になってくるであろう。

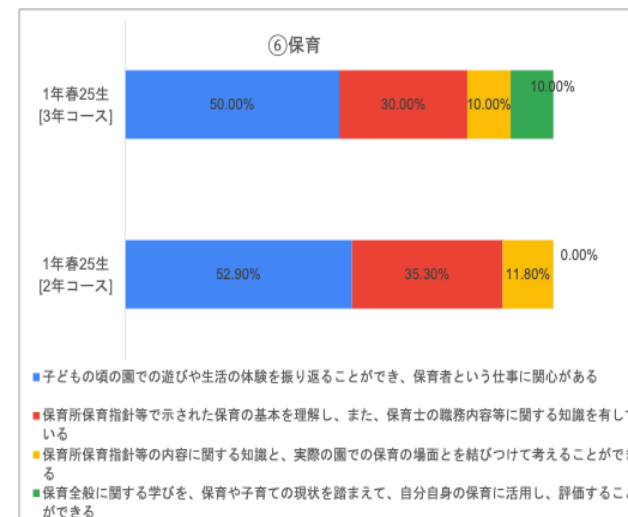
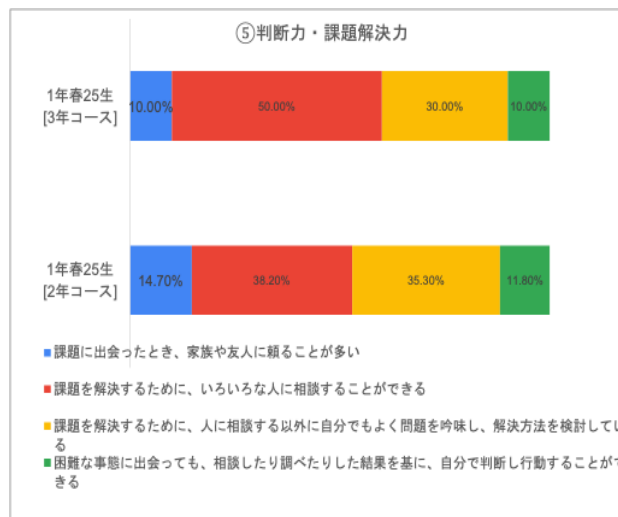
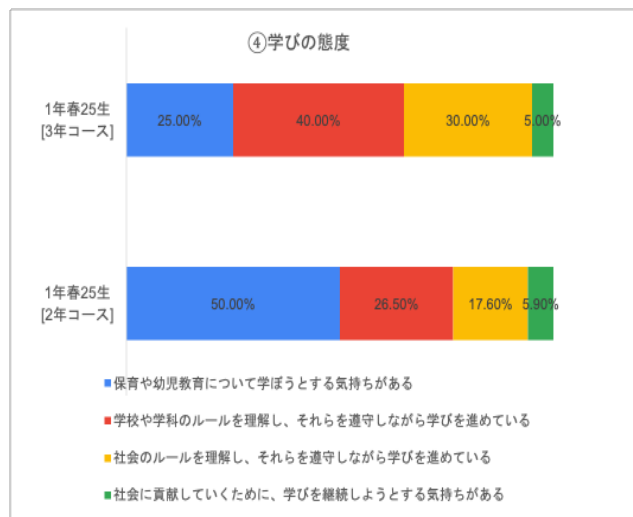
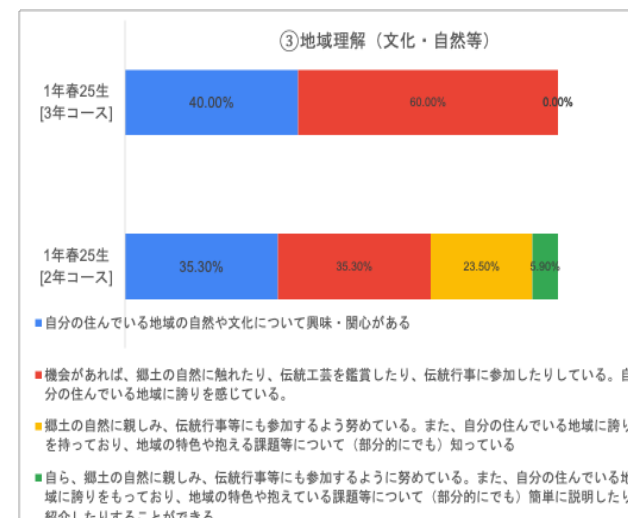
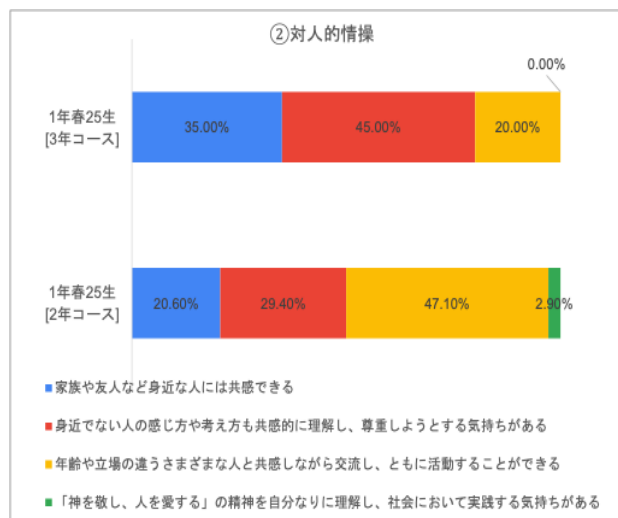
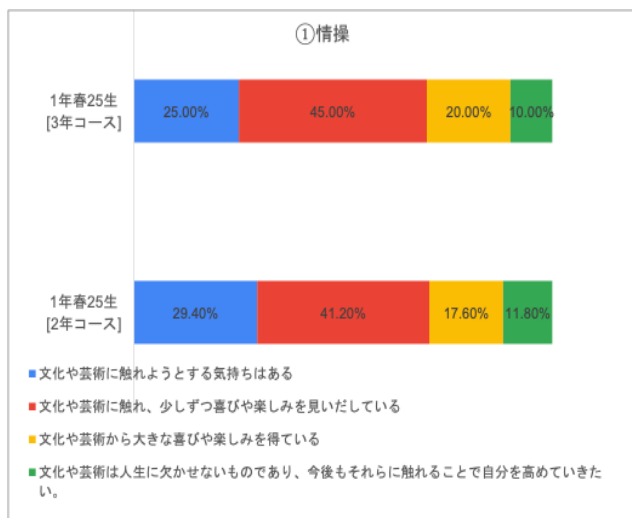
幼児保育学科の教育課程において、1 年次の冬季、2 年次の夏季に計画されている保育実習、教育実習は学生の重要な学びの機会である。学生は保育者の姿、子どもの姿から、座学で得た知識・理論や技術の確認や新たな学びを獲得し成長する機会となっていることもうかがえる。一方で、専門職として求められる力への意識の高まり、比較し自身を見つめ直す機会となることが、学修成果の評価の揺れ動きをもたらす可能性がある。この点からも実習生として直面し経験する困難さ、学生の育ちの現在位置について、学科として共通理解を図る機会を担保した上で、学生指導・支援を展開することが、重要であろう。2 年次の後期は、学生にとって、さらに専門的な理論学習と実践での経験値の統合を図る貴重な時間となるよう学科として質の高い教育活動の展開を目指していく必要があるであろう。

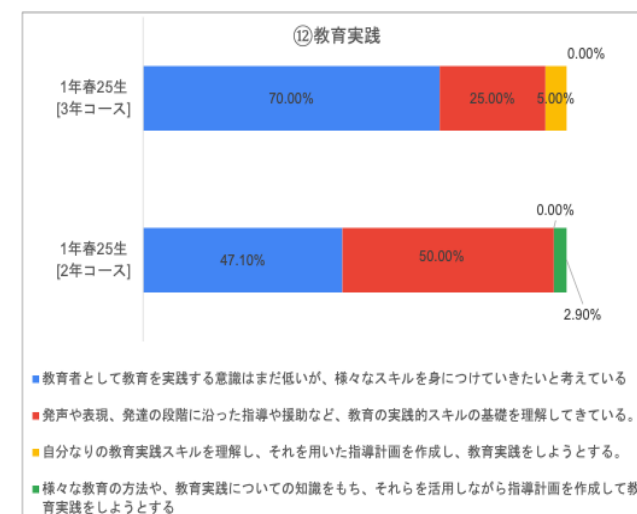
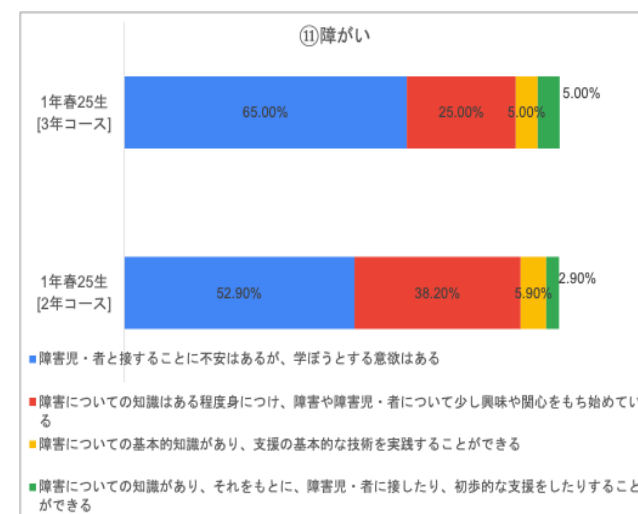
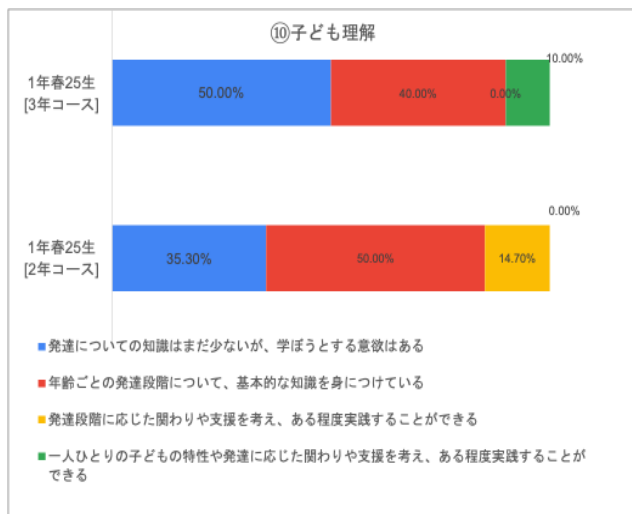
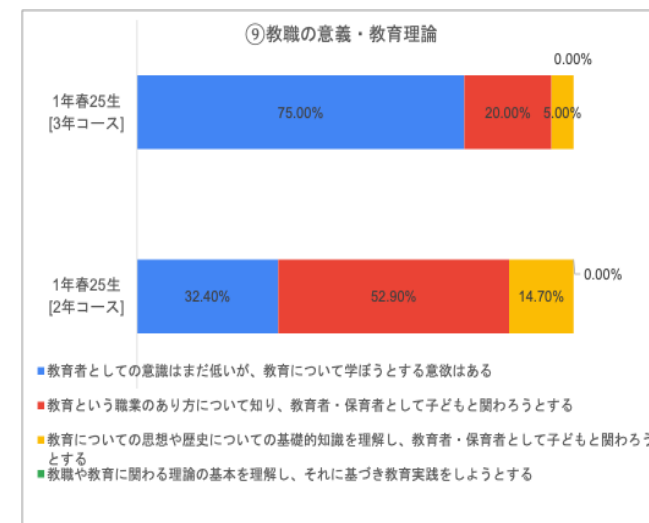
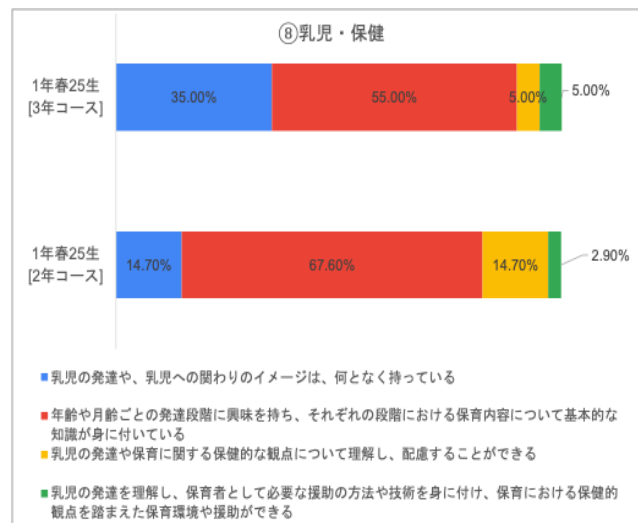
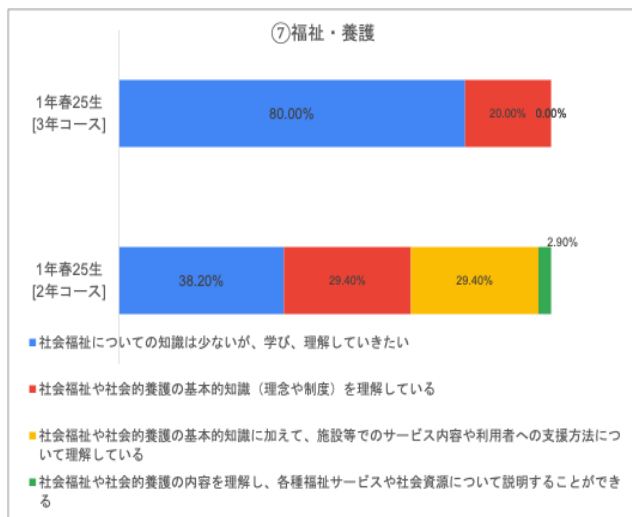


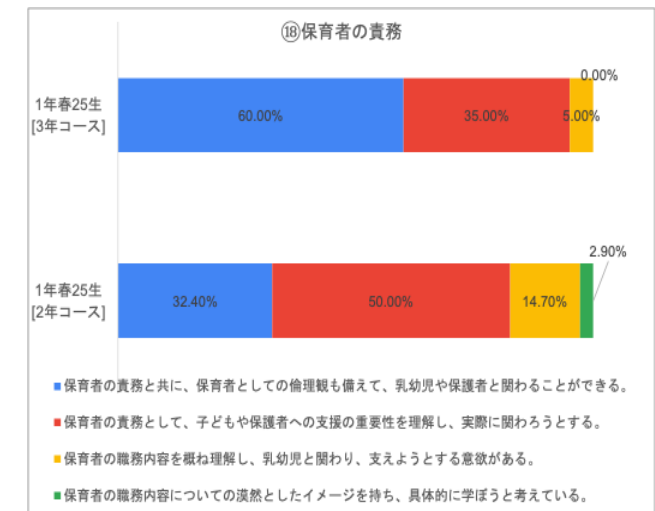
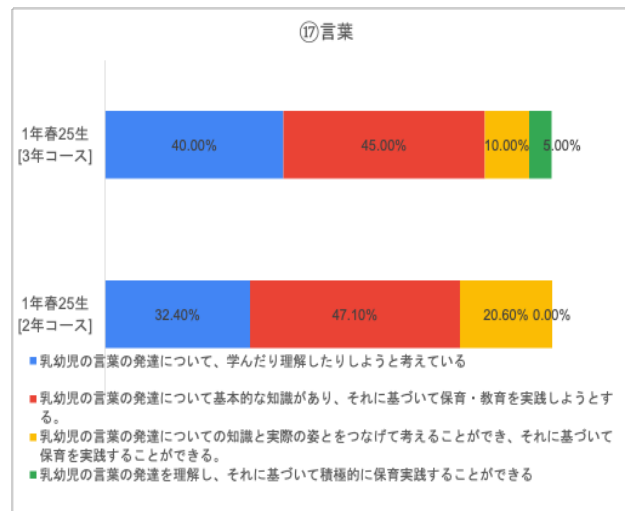
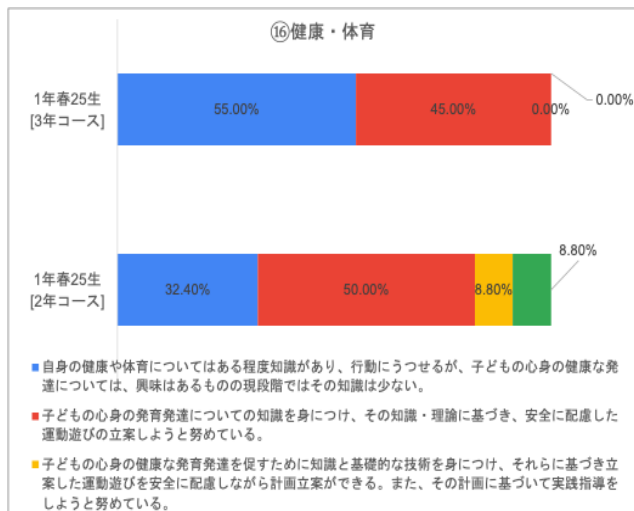
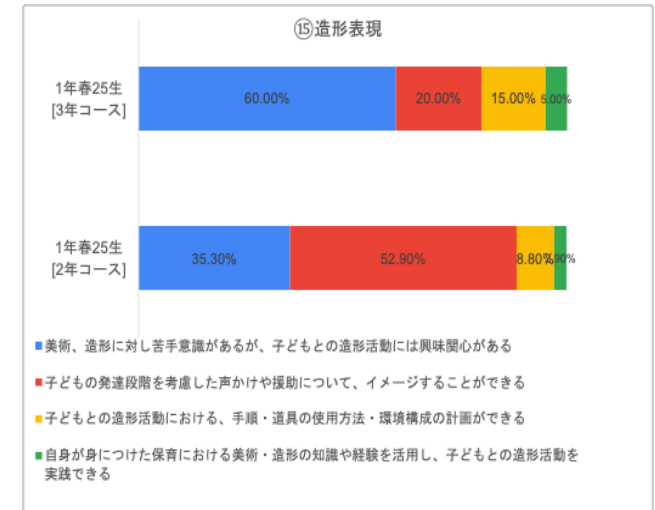
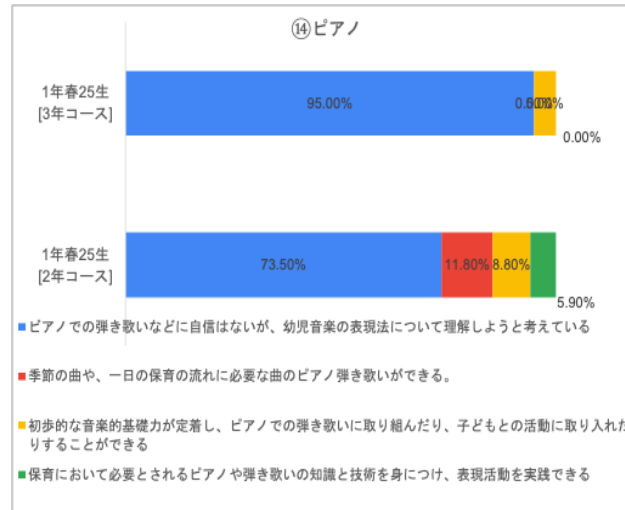
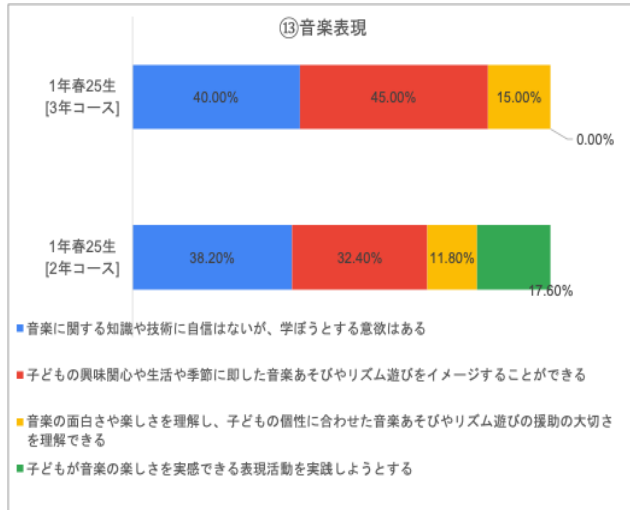


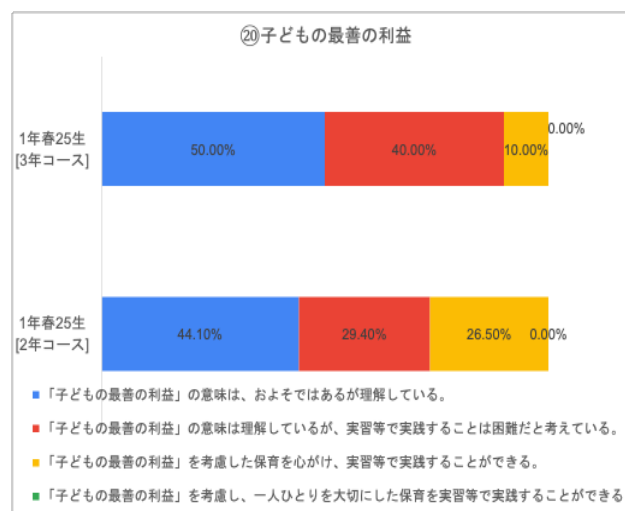
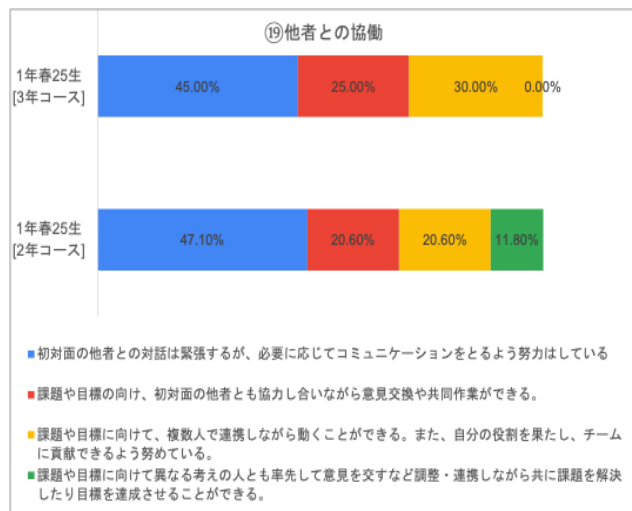












4. 介護福祉学科について

(1) 結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表 3 の通りである。

表 3 介護福祉学科のディプロマポリシー

1. 介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力、豊かな人間性と高い倫理性を身につけている。
2. 介護福祉士として自立支援の観点に立ち、身体的・心理的・社会的側面から援助・支援できる能力を身につけている。
3. 常に自己研鑽し、当事者にとっての最善の介護実践を多職種協働チームと展開できる能力を身につけている。

学科のディプロマポリシーに照らして、学修成果を学生自身の主観的評価から検証した。ディプロマポリシー1 は人間性の基盤を示しており、これに対応する評価の観点は、①豊かな人間性、②学びへの態度、③判断力・問題解決能力、④地域理解、⑦思考過程の 5 項目であり、職能的専門性を示すディプロマポリシー2 に対応する評価の観点は、⑤人間と社会、⑥介護技術、⑧こころとからだのしくみ・障害、⑨医療的ケアの 4 項目である。そして、より高度な人材養成としての視点によるディプロマポリシー3 に対応する評価の観点は、⑩他者との協働、⑪職業倫理の自覚の 2 項目である。結果は 17 ページ以降に示した。2 年生 11 名、1 年生 15 名の回収率および有効回答率は、全ての調査において 100%であった。

(2) フィッシャー検定の結果

1) 2024 年度生の結果

2024 年度生 11 名について、1 年次（前期・後期）と 2 年次前期における 4 段階ルーブリック評価を比較した。分析にあたっては、ルーブリック評価を「4（最高到達）」と「1～3」に再分類し、最高段階到達割合の差を検討するため、フィッシャーの正確確率検定（両側）を実施した。その結果、いずれの評価観点においても統計的に有意な差は認められなかった。

2) 2024 年度生のディプロマポリシーの検証

2 年生前期の教育課程を終えた 2024 年度生の結果について、3 つのディプロマポリシーの観点から検証を行う。

学生の主観的評価をディプロマポリシーごとに検証すると、ディプロマポリシー 1

に対応する観点では、「①豊かな人間性」、「②学びへの態度」、「③判断力・問題解決能力」、「④地域理解」、「⑦思考過程」の諸項目において、1年次（前期・後期）から2年次前期にかけて、評価が低下する傾向がみられた。とりわけ「③判断力・問題解決能力」では、2年次前期において評価段階すべての低下がみられたが、これは能力の低下というよりも、実習等の経験を通して自己の到達度をより現実的に捉えるようになった結果と考えられる。学生が自身の課題を自覚し、到達基準をより厳密に適用している様子がうかがえ、人間性や判断力といった基盤的資質は安定的に形成されていると評価できる。

ディプロマポリシー2に対応する観点では、「⑤人間と社会」、「⑥介護技術」、「⑧こころとからだのしくみ・障害」、「⑨医療的ケア」の各項目において、評価段階4の割合は少ないが、順調に段階を上げて推移している。とりわけ「⑨医療的ケア」は、1年次前期当初は評価段階1の割合が81.8%もあったが、2年次前期には9.1%までに減少し他の高い評価段階が割合を増し、評価段階3以上では全体の72.7%にまで達している。これは、実習や専門科目の履修を通して専門性を段階的に高めている過程にあり、到達基準を理解した上で慎重に自己評価している姿勢がうかがえる。社会保障制度の理解や、根拠に基づく生活支援技術、こころとからだのしくみの理解、医療的ケアの実践に関する自己認識は、少なくとも主観的評価の水準において維持されており、専門職としての基礎的能力は着実に涵養されていると考えられる。

ディプロマポリシー3に対応する観点では、「⑩他者との協働」および「⑪職業倫理の自覚」において、評価段階4の割合はどの評価時点においても少ないが、評価段階2以下が全体の90%を占めていたものが、評価段階3以上が半数以上にまでなった。注目したいのは、この項目は、知識の獲得だけでは得られない、社会的な実践から視野を広げなければならないものであり、実習等を通して専門職としての社会的役割を意識しながら学修を重ねてきた様子がうかがえる。自己研鑽を前提とした姿勢や、他者と連携して支援を展開する意識は、段階的に形成されていると評価できる。

まとめとして述べると、いずれのディプロマポリシーに対応する観点においても、2024年度生は評価段階4に至っていない項目が多かったものの、穏やかな上昇傾向で学修を進めていることが示された。特に判断力・問題解決能力にみられた自己評価の変化は、専門職としての自己覚知を反映したものである可能性が高い。人間性や判断力、専門的知識・技術、協働性や倫理観といったディプロマポリシーで求められる資

質・能力について、学生自身が一定の到達を自覚しつつ、より慎重に自己を見つめ直している姿がうかがえる。これらの結果は、本学科の教育課程がディプロマポリシーの到達に向けて、学生の専門職形成を着実に支えていることを示すものである。

（３）教育活動の見直し

2024 年度生の学修成果について、第 1 回（1 年次前期）から第 3 回（2 年次後期）までの推移をみると、全 11 項目において概ね低位から評価が徐々に上昇する傾向が認められ、学生の慎重な成長実感が確認された。

この結果から、学生の自己評価は低位から始まったとはいえ、実習等の経験を通して自己をより客観的に捉える姿勢が育っていることがうかがえる。こうした自己覚知を基盤とする慎重で着実な成長は、各科目において学生と教員との対話を重ねながら積み上げられてきた日々の教育実践の成果であると考えられる。特に、専門基礎科目と演習科目、そして介護実習との関連づけは、開科以来、少人数制で運営されてきた授業の中で、各担当教員の工夫により丁寧に図られてきた。教室で得た知識が演習や実習体験によって具体化され、さらに学内での振り返りによって意味づけられるという学習の積み重ねが、今回の自己評価の着実な向上につながっていると考えられる。今後も、実習前後の振り返りや共有の機会を通して、科目間のつながりを学生自身が意識できるようにすることが期待される。

特に、「生活支援技術」「介護過程」「介護の基本」等における事例検討やアセスメント演習では、学生同士の対話やグループ協議が少人数制の利点として生かされ、判断力・問題解決能力の育成に着実につながっていることが示唆される。今後は、学習内容相互の関連を整理し、学生自身が「何を学び、どのように力が伸びてきたのか」を振り返りやすくする工夫が、さらなる成長を支えるものと考えられる。

さらに、「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」「人間と社会」などの専門基礎科目と実習や技術演習との結び付きは、すでに多くの授業の工夫のもと実践されている。今回の結果は、教室での学びと現場での体験が相互に影響し合いながら学生の理解を深めていることを示すものである。実習前後の振り返りやカンファレンス内容を共有することに加え、既習内容との関連付けを行うことで、学びの連続性をさらに明確にすることが期待される。

加えて、「地域文化論」のように地域での社会貢献活動を演習として位置付けるリベ

ラルアーツ科目も授業内容の充実度ともに重要性を増している。地域の歴史や文化、人々の暮らしに触れる経験は、課外でのボランティア活動への参加や、介護実践の基盤となる人間理解や倫理観を育む土台となる。地域住民との交流やフィールドワークを通じて、生活者の視点で学生が「人を支えるとは何か」を広い視野で考える機会を得ることは、ディプロマポリシー1 に掲げる豊かな人間性の涵養に直結する。同時に、地域社会の一員としての自覚を育む点で、将来的な専門職としての社会的責任の理解にもつながることが期待される。

以上のように、各科目で培われてきた教授方法を相互に関連付け、それぞれの科目が役割を果たしながら支え合うことで、学生の学修成果は形成されている。今後も、少人数制指導の中で積み重ねられてきた丁寧な取り組みと教員相互の強固な連携を大切にしつつ、科目間のつながりを意識した振り返りを重ねることで、ディプロマポリシーの到達をより確かなものにしていくことが望まれる。また、学生の自己覚知に基づいた振り返りを通して理論と実践の統合を図ることが期待される。そのためにも、教育課程の改善を継続的に進め、学生が主体的に学修し、地域社会に貢献できる介護福祉士を育成することが本学教育の使命であるといえる。

